

伊勢参宮における講組織の変容

— 明石市東二見を事例に —

小 野 寺 淳

I. はじめに

- (1) 宗教的講の研究意義
- (2) 伊勢講の分布と問題の所在

II. 明石市東二見の地域変容

- (1) 近世村落東二見と伊勢信仰
- (2) 明治以降における地域変容

III. 伊勢講の講集団とその特質

- (1) 伊勢講の再編成と講集団
- (2) 伊勢講と他の宗教的講との関係

IV. 伊勢講の組織とその変容

- (1) 江戸後期における伊勢講の組織
- (2) 明治中期以降における伊勢講の変容
— 経済的变化との関わりで —
- (3) 高度経済成長初期における伊勢講の変容

V. おわりに

I. はじめに

(1) 宗教的講の研究意義

日本における宗教地理学の一つは、聖なる場とその周囲に立地する集落の研究から始まった。やがてその聖なる場を信仰するエリア（地域）の研究となり、さらにそのエリアから聖なる場へ向かうルートの研究へと進展した。この巡礼、社寺参詣の歴史地理学的研究では、それらのルートの復元や変化を通して、巡礼や社寺参詣の意味を問う。いまだ十分な成果が得られているわけではないが、そ

の指針の幾つかは田中智彦の一連の研究¹⁾によって示されたと評価することができよう。生前の田中が意図していた課題を筆者なりに大きくまとめると、以下の3点である。

①日本の巡礼路や社寺参詣路の復元をベースに、巡礼者や参詣者の意識を問う。

②日本の巡礼地を全国的巡礼地、地域的巡礼地、ミニチュア巡礼地の三つに類型化し、その相互関連を問うことによって、日本の巡礼の特質を見出す。

③その上で、世界の様々な巡礼の中で日本の巡礼や社寺参詣を位置づける。これが、田中の最終目標であった。

こうした田中の研究課題は、これからの宗教・文化の歴史地理学にとって重要な課題であり、今後も継続される必要があろう。さらに付け加えるとするならば、日本人が巡礼や社寺参詣に求めたものの普遍性、同時にその変質を考察することも重要な課題であり、このためには、宗教的講組織²⁾の変質を明らかにすることが必要となる。日本の集落における宗教的講組織のあり方とその変容の解明は、日本人の宗教に対する寛容性の始源を求める一つのアプローチでもあろう。

もちろん、宗教的講組織は日本史、日本民俗学、宗教学などで数多くの研究が行われてきた。これら隣接分野の研究史とその成果は紙数の関係で触れないが、歴史地理学における研究成果については、宗教的講を取り上げ

る意義を明確にする上で言及が必要であろう。歴史地理学における宗教的講への着目は、近世村落を基礎地域と位置づけた水津一朗の基礎地域論から始まる³⁾。その後、村落共同体と小地域集団の関係を集落形態との関わりの中で解明した研究が相次いだことは周知のごとくである。これら先学の優れた研究成果では、小地域集団の一つとして様々な宗教的講集団も取り上げられた。そこでは、地域的差異があることも指摘された上で、宗教的講は地縁的な宗教組織であり、組やユイと同様に対等な小地域集団という理解であったと思う⁴⁾。この理解に異を唱えるつもりはないが、さらに一步踏み込んで考えてみると、宗教的講の地域的差異は、それが制度的に発生したものではないとするならば、信仰を受容した地域の経済的・社会的関係、さらに信仰圏との関わりでとらえ直す必要が生じるであろう。

かつて宮田登は山岳信仰に3次の同心円的な信仰圏の存在を見出した⁵⁾。このモデルの圏域設定基準の曖昧さを批判した岩鼻通明は、出羽三山を事例に3次の同心円的な信仰圏内部における信仰形態の差異を示した⁶⁾。この岩鼻の卓抜な見解を受けて、神社の信仰圏でも適応可能とした松井圭介⁷⁾、かつて宮田が研究対象とした岩木山信仰を研究した金子直樹⁸⁾など、信仰圏に関する詳細な研究成果が生まれている⁹⁾。しかし、信仰習俗の差異は明らかにされても、信仰圏ごとの講組織のあり方の差異、またその変容については、いずれも十分に論じられたとはいえない。最近では筒井裕が昭和初期における鳥海山大物忌神社の講の組織化を明らかにしたが、村落社会の変化との関係で講組織を論じるまでには至っていない¹⁰⁾。

一方、地域の経済的・社会的変化や地域間交流のなかで宗教的講集団を取り扱った近年の研究には、船杉力修、三木一彦などの成果がある。船杉力修は戦国期の出雲田荘におけ

る土豪層の伊勢信仰の受容を明らかにした¹¹⁾。三木一彦は18世紀中期の秩父郡大野村における参詣講の成立を扱った¹²⁾。いずれも優れた成果であるが、講組織の変化を中心にした研究ではない。浄土真宗地域の福井市とその近郊における道場の変遷を扱った藤村健一の研究は興味深いテーマであるが、村落社会の経済的变化との関係が課題として残された¹³⁾。

さらに日本民俗学の研究成果でも、管見の限りでは講組織が変容することは認識されていても、聞き取りのみでは、変容を必ずしも十分に明らかにすることはできない。このためには、講文書の分析が必要となる。

(2) 伊勢講の分布と問題の所在

図1は、1973～92年の20年間に伊勢神宮で神楽を奉納した講の台帳をもとに作成した伊勢講（神明講などの別称があるが、以下伊勢講に統一）の分布である。神宮司廳によれば、神楽奉納をしない講も数多くあるので、台帳の数は全国の伊勢講の1割程度にすぎないのではないかという。しかし、神楽奉納を行った講は熱心な崇敬者であり、従来の分布と比較すれば基準が明確である。この分布から崇敬の厚薄の傾向を読みとることが可能である。

全国に広がっていた伊勢講は、高度経済成長期を経過すると、おそらく近畿地方でも減少したであろうが、より以遠ではさらに減少が著しかったことが推測できる。これに対して、山形県庄内地方など特定の地域の集落では、伊勢講が数多くみられる。これを存続とみるか、むしろ高度経済成長期から盛んになったとみるかは、今後検討されねばならない。とはいえ、近畿地方とその周辺地域に熱心な伊勢信仰を有する集落が多い理由は、集落社会における伊勢講の組織のあり方を問わなければ解明されないであろう。すでに西垣晴次が指摘したように、近世村落のいかなる階層によって伊勢講が組織されたかは、依然

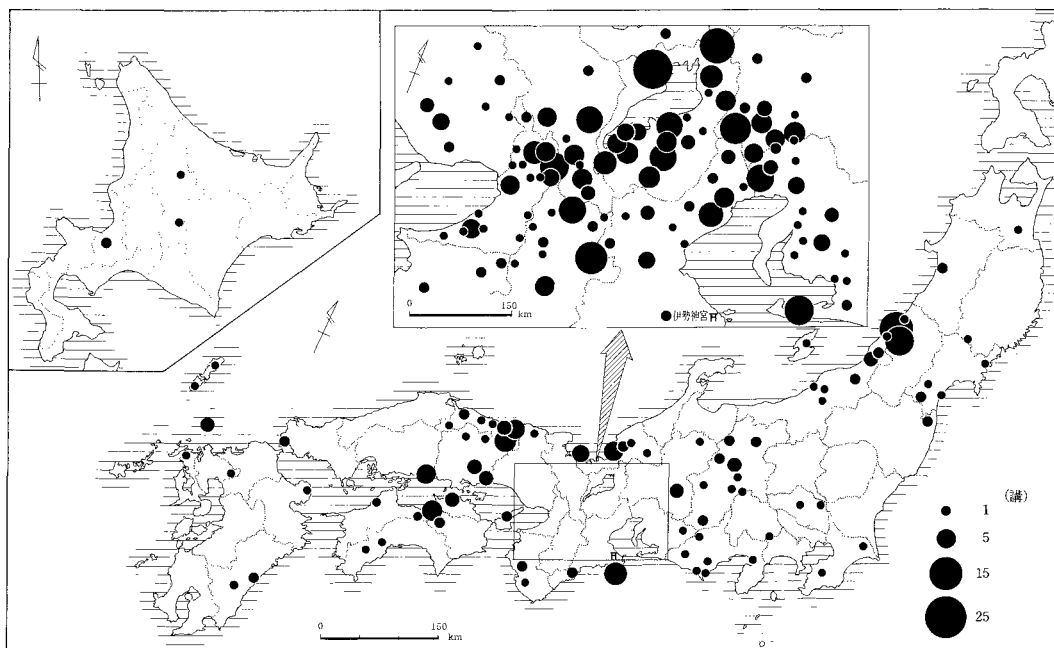


図1 現代における伊勢講の市郡別分布 (1973~1992年)

資料) 神宮司廳神楽殿「県別伊勢講台帳」より作成。この台帳は神楽の申し込みをした講のリストであり、全国の伊勢講の1割程度を示すものと想定される。

として十分な研究成果が得られていない¹⁴⁾。

伊勢参宮道中日記を収集した際の聞き取りでは、関東地方の農村部においては高度経済成長期に伊勢講が消滅していく¹⁵⁾。わずかに残る江戸後期の講文書などによれば、伊勢講の講員は一つの近世村落でみると数人あるいは数十人の戸主からなり、複数の近世村落で一つの伊勢講を組織し、代参によって伊勢参宮を行った例が多い。すなわち、近世村落あるいはその内部の集団を単位として伊勢講が組織されたわけではなかった。このような伊勢講の組織のあり方が、高度経済成長期に伊勢講が消滅した大きな理由と考えられる。これに対して、伊勢講が今なお存続する近畿地方とその周辺地域では、関東地方とは異なる講組織がみられる。本研究で対象とする明石市東二見や加古川流域など播磨国東部では、一つの近世村落に複数の伊勢講が組織されており¹⁶⁾、総参りと称して村落構成員の多くが

定期的に伊勢参宮を行うとするのが通説である¹⁷⁾。

以上のように、伊勢神宮に近い近畿地方やその周辺地域と、遠隔地である関東地方とでは、伊勢講の組織に違いが見られるようである。また、伊勢講組織の変容については、近畿地方とその周辺地域においても、江戸期から継続する講文書の現存がほとんど確認されていないために未解明な点が多い。伊勢講組織の地域的差異とその変容は、伊勢信仰の受容のあり方、ならびに地域社会の経済的・社会的変化と密接に関わっているものと想定される。

そこで、本研究では明石市東二見を事例に、江戸時代における伊勢講の組織が地域社会の経済的・社会的変化の中でいかに変容したかについて明らかにすることを目的とする。なお、以上の研究目的により、本研究では個人での伊勢参宮者は扱わない。

Ⅱ. 明石市東二見の地域変容

(1) 近世村落東二見と伊勢信仰

兵庫県明石市東二見町は市域の西端に位置し、東二見、西二見、福里、南二見に行政区分される。このうち南二見は昭和45年(1970)に埋め立てられ、工業団地と海浜公園となる。近世村落は加古郡東二見、西二見、福里であり、明治22年(1889)に二見村として合併、昭和2年(1927)に町制施行、昭和26年(1951)には明石市に合併された。

江戸時代の二見町域は明石藩領と姫路藩領の境に位置し、慶長5年(1600)に姫路藩、元和3年(1617)に明石藩と領主が交代、寛永10年(1633)には幕府領となった。その後、文化13年(1816)には武蔵国埼玉郡忍藩の飛地となり、以後幕府領と忍藩領が交互に繰り返される。文政2年(1819)には再び幕府領、天保元年(1830)に忍藩領、天保14年(1843)に幕府領、嘉永元年(1848)に忍藩領となって幕末を迎えた¹⁸⁾。明治初年の東二見村の村高は1,142石7升8合であり、西二見村のそれは1,472石5斗1升5合であった。

東二見村と西二見村の村高はほぼ拮抗しており、その境界には御厨神社が位置する。御厨神社は二見港に面する君貢神社の地から、11世紀初頭の長暦年間に現地に移ったと伝えられるが、文書が焼失したために成立年代は明らかにできない。しかし、伊勢神宮との関係を示唆する御厨神社の存在は、この地における伊勢信仰の受容が鎌倉初期であった可能性を推測させる¹⁹⁾。また、東二見村と西二見村の村境に御厨神社が位置しており、村切りによる近世村落の成立以降、いわゆる双分制の存在を認めることができる。御厨神社では宮座を確認することができないが、かつては宮座が存在したことは容易に推測できる。東二見村における江戸期の伊勢講が、後述するように宮座的性格を有することへの連続性は、今後検討されねばならないであろう。

(2) 明治以降における地域変容

図2には、明治14年(1881)の地籍図をもとに東二見村南部の土地利用と寺社・小祠を示した。東二見は古代から蛸漁の盛んな漁村であり、また瀬戸内海の良港として知られた。江戸後期では忍藩領が加古川流域に点在し、忍藩領の東二見村は、加古川流域の忍藩年貢米の津出し港であったと考えられる。また江戸後期の二見港は、印南台地西部の綿作栽培の興隆を背景に、干鰯の集荷と木綿の出荷を主とする商港として機能した²⁰⁾。この二見港を中心に、中心市街地は山陽電鉄東二見駅まで円形に広がる。町丁名は北の町南、地蔵町南、原の町、西の町、仲の町、東の町である。昭和46年(1971)以降、これらの町丁の人口は減少の一途をたどっている²¹⁾。

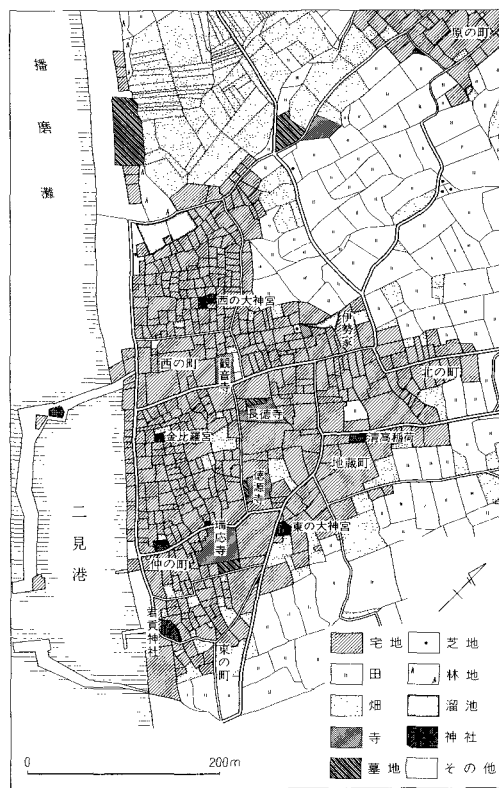


図2 明治前期における東二見村南部の土地利用と寺社資料) 明治14年「播磨国加古郡東二見村地図」室田家及び増本家所蔵より作成。

近代になると、東二見の市街地には大正7年(1918)に播磨帆布株式会社(現、播磨重布)が設立された。天明5年(1785)に高砂町の松右衛門が耐久性に優れた帆布を考案したことにより、明治以降においても神戸を中心に東播磨の瀬戸内沿岸地域で帆布の製造が盛んとなる²²⁾。戦前昭和期には、山陽本線土山駅南部の東二見地内に紡機製造会社、横河橋梁製作所、琴浦紡績会社が相次いで設立された。紡機製造会社は昭和10年(1935)に神戸資本により創業され、現在は東洋機械金属の工場となる。東二見村の土豪であった横河家は横河橋梁を設立した。昭和12年(1937)創業の琴浦紡績は岡山県児島郡琴浦町下村の資本であった。この時期、土山駅周辺に2つの紡績関連会社が設立されたのは、木綿栽培地域であった北部の印南台地を後背地としたためと考えられる。

大正12年(1923)には明石一姫路間に神戸姫路電気鉄道(現、山陽電鉄)が開通、東二見駅の開業とともに、駅南部の北の町南は駅前商店街として繁栄した。料理屋が軒を連ねたといわれ、現在でもその名残をとどめる。昭和10年(1935)には東二見字城ノ上から西二見字東相々にかけての海浜6,000坪に海水浴場が設けられ、夏季には海水浴客でにぎわった。一方、駅北部は依然として水田が広範囲を占め、米と小麦の二毛作が行われていた。これらの水田は、江戸中期の干ばつ期にその多くが造成された溜池灌漑に依存し、これら溜池では鯉の養殖も行われた。当時の二見町主要農産物は米5,503石、麦2,624石、西瓜36,000貫、水産物は価格で蛸82,400円であった。

その後、戦時下では4,300人前後と人口が停滞したが、戦後は山陽電鉄北側の水田地帯で宅地開発が進み、昭和51年(1976)に明石二見ハイツ90戸、昭和56年(1981)には東二見スカイハイツ67戸と、アパート・マンションが建設された²³⁾。平成2年(1990)にはダ

イエーを核とした大規模店舗が開店し、商業機能の中心は北部に移行している。

Ⅲ. 伊勢講の講集団とその特質

(1) 伊勢講の再編成と講集団

前述したように、江戸期以前に東二見では伊勢信仰が土豪層によって受容されていたであろう。しかし、在地土豪横河家は江戸初期に東二見へ来住し、講親を世襲した数家も元禄期に来住したとの伝承があることを考えると、東二見の伊勢講は元禄期以降、18世紀に再編成されたと推測される。

東二見は外宮御師足代式部大夫の配札地域(檀那場)であった。安永6年(1777)、足代は伊予・備前国に各1万軒余、備中5,800軒、次いで播磨には2,350軒の檀方家数を有した²⁴⁾。「旧師職総人名其他取調帳」に記された足代弘直(明治3年[1870]提出)の項には、播磨国三木郡、加古郡、明石郡が配札地域であったことが記されている²⁵⁾。また東二見には伊勢家と呼ばれた家屋があり、足代の手代が配札する際の宿に使用されたものと推測される。ただし、伊勢家は家屋のみを指すのではなく、講親の代表者を指す場合もあった²⁶⁾。

18世紀に再編成された伊勢講は10の講があり、東西5つずつに分かれていた²⁷⁾。御厨神社を中心に東二見と西二見に分かれたように、東二見の内部も東西の双分制がみられる。東の講は分銅講・増勢講・太平楽講・狸々講・日上講であり、東の大神宮を祀る。西の講は扇講・山中講・源氏講・紅梅講・白梅講であり、西の大神宮を祀る(図2参照)。東の大神宮では伊勢参宮時に赤い幟が掲げられたという。社殿は昭和6年(1931)改築、境内には文政13年(1830)の手水鉢が残る。西の大神宮では伊勢参宮時には青い幟が掲げられ、社殿は昭和9年(1934)改築、境内には天保13年(1842)の手水鉢がある。

講文書と聞き取りによれば、10の講は以下のような集団であった。分銅講は高橋家(屋

号、花屋)を中心とした商家集団であり、農家、職人(船大工、左官、魚屋)を含んでいた。増勢講の名称は増本家(屋号、干鯛屋)の伊勢講にちなむと考えられ、増本家を中心とした商家集団であったと想定される。増勢講は増栄講と呼ばれた頼母子講を内包していた²⁸⁾。太平楽講の文書は見出せなかったが、講親であった室田治三郎が最後の伊勢家を勤めたという。猩々講は綿屋を営んだ尾上家が講親を世襲し、商家集団であったと考えられる。講文書は現存せず、詳細は不明であり、昭和28年(1953)以降に解散したという。日上講は、最後の講親であった宮北隼人が昭和58年(1983)死亡したことにより消滅したという。

扇講の講員は、西の町の大西家(屋号、網屋)を中心にした漁家・魚屋の集団である。奥栄講と呼ばれた頼母子講を内包していた。山中講の講員は、現在では農家を含むが、仲の町にあった中屋家を中心とした商家集団であったと想定される。山中講の名称は中屋の屋号に由来し、中屋講ともいう。源氏講は、北の町の八木家(屋号、生屋)を中心とした商家集団であった。昭和30年代に解散したが、明治中期に新調したビロード地の幟が保管されており、明治中期が伊勢講の盛時であったことを物語る。紅梅講は、杵本家(屋号、葉屋)を中心とした商家集団と想定されるが、戦後の講文書のみであり、講員名から江戸期の職業を明らかにすることはできない。白梅講は昭和33年(1958)には消滅し、講文書は残されていない。

以上、遅くとも18世紀に再編成された双分制の伊勢講の他、原の町にも伊勢講が組織された(図2参照)。原の町は原八軒と呼ばれる草分け百姓が開発した新田集落と考えられ、明治中期に原の町の人口増加にともなって分離独立した講集団であった。全戸農家であったが、戦後は講親が大歳神社の管理者を兼ねるようになり、町内会全戸が伊勢講に加

入した。このため、現在では講員数が最も多い。この他、現在では消滅したが、上記の伊勢講に加入できなかった人々が大正期に伊勢講を組織し、大正講と呼ばれたという。このことと講文書から、18世紀に再編成された伊勢講は新規加入を排除し、講員は東二見の旧家に限られていたことがわかる。また、その多くは有力な商家を講親とする商家集団と網元を講親とする漁家集団であった。

(2) 伊勢講と他の宗教的講との関係

聞き取りと講文書によれば、東二見には26の宗教的講を確認できた。このうち消滅した講は、18世紀に再編成された10の伊勢講のうち5つと、大正講、君貢神社の稲荷講(昭和30年[1955]に解散)、富永稲荷講、秋葉講である。秋葉講の講親であった増本家には明治5年(1872)銘の帳箱が残るが、現在では秋葉講の存在は知られていない。

一方、存続するのは、18世紀に再編成された伊勢講10のうち5つと、原の町の伊勢講²⁹⁾、このほかに広峯講と祇園講、愛宕講、漁家が信仰する住吉講・戎講・竜宮講・千光寺講、4つの稲荷講のうち京極稲荷と清高稲荷の講、山上講、念仏講³⁰⁾の17である。これらの講の多くは高齢者の割合が高く、現在では必ずしも盛んとは言えない。以下、伊勢講の講員が組織した宗教的講について、その関わりを示す。

存続する稲荷講は清高稲荷と京極稲荷である。清高稲荷の建立年は不明であるが、石灯笼には安政6年(1859)の銘があり、講員は数年に1度伏見稲荷に参詣する。京極稲荷は北の町の町内会が管理している。旧家の屋敷地内にも稲荷社が多く、古いものは幕末であることから、この頃から稲荷信仰が隆盛したと考えられる。清高稲荷の講員は伊勢講の講親を勤めた旧家を中心であるが、伊勢講に加入していない商店主も多い。旧家は複数の宗教的講に加入するのが一般的であり、18世紀

に再編成された伊勢講の講員である旧家もまた、複数の講の加入者である。

東二見の山上講は大峰山上二大講と称し、播州岩組に属する。大正14年（1925）「大峰山上二大講講則」によれば、前年に発足したと考えられ、聞き取りによれば伊勢講の講員の一部が山上講を組織したという。

姫路市広峯神社の広峯講は牛頭天王を祀り天王講ともいう。広峯神社は鎌倉末期に播磨一円及びその隣国に信仰圏をもち、京都八坂神社と本社争いをしたとされる³¹⁾。「伊勢のお礼詣り」と称して、広峯神社に参詣する者が多く、伊勢音頭を唄いながら酒宴を催したという。東二見では伊勢講の講員と広峯講のそれとが重複していると考えられ、少なくとも江戸中期より毎年参詣が行われた。現在では農会長が代表で毎年広峯参詣を行う。

東二見の祇園講は、後述するように伊勢講からの援助金で賄われ、伊勢講の下部組織として位置づけられる。祇園講の講員の代表者が姫路の広峯神社へ参詣するが、多くの講員は社寺参詣を行わない。かわりに伊勢参宮者が帰路に必ず京都の八坂神社に参詣する。愛宕講もまた同様である。愛宕講は原の町伊勢講の下部組織と位置づけられ、伊勢参宮者は帰路に京都の愛宕神社に参詣する。

ところで、図3に示したように東二見では、海苔の養殖が始まる1970年代になって専業漁家数が安定した。1965年に明石市林崎漁業協同組合で浮動式養殖法が開発されると、兵庫県内の漁村に海苔養殖が広まる³²⁾。しかし、これ以前は、豊漁・不漁によって漁家の転入・転出は著しかったと推測される。扇講は漁家集団が組織した伊勢講であるが、現在の講員は1970年以前からの専業漁家に限られている。

その後新たに転入した漁家、あるいは雇用や兼業から専業となった漁家の多くは、住吉講、戎講、竜宮講、千光寺講のいずれかに属した（図4参照）。これらの講は漁民が信仰

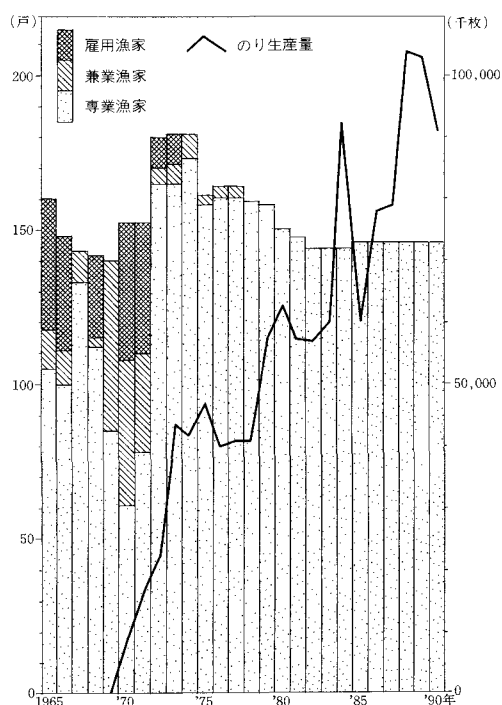


図3 明石市東二見における漁家数と海苔生産量の変化（1965～1990年）

資料）「明石市統計書」より作成。

する社寺であり、伊勢講の講員も加入している。なかでも住吉講と戎講は東二見の漁家を二分する。住吉講は西の講とも呼ばれ、年1回3月住吉大社に参詣を行う。戎講は東の講とも呼ばれ、横河公園の西南端にある恵比須社を祀り、西宮神社に参詣する。海岸線に面する埋立地に居住する漁家は、港寄りに戎講の講員の住居が集まり、その西側に住吉講の講員が集住しており、講の違いによる棲み分けがみられる。

竜宮講は仲の町の金比羅社を祀り、中の講ともいう。二見港築港の後、四国金比羅参詣から海路二見港に着船するようになった伊勢参宮者のための船宿もあったといわれる。千光寺講は、明治36年に鹿之瀬漁場³³⁾の利用権協定が締結された際、漁場境界線の山あての一つである淡路島先山千光寺の観音信仰が、東二見の漁家に受容されたものと考えら



図4 明石市東二見における漁家の講別分布 (1993年)
(聞き取りより作成)

れる。図5に示した鹿之瀬漁場は瀬戸内海有数の漁場であり、千光寺講は淡路島の漁村に多くみられる。

以上のように、東二見の中心市街地に居住する旧家は伊勢講の講員であるとともに、伊

勢講の下部組織としての講を形成し、また稲荷信仰や大峰山信仰、漁民信仰の講にも関わってきた。しかし、東二見では様々な講が組織される中で、つねに伊勢講がその中心に位置づけられた点に留意しなければならない。

IV. 伊勢講の組織とその変容

(1) 江戸後期における伊勢講の組織

ここで、講文書をもとに江戸後期における伊勢講の組織をみておこう(図6参照)³⁴⁾。伊勢講の講員は年会費を納める(「伊勢講人数之帳」に記載)。また各伊勢講は講田を所有し、小作料を徴収した(「田畑入附帳」に記載)。この両者が伊勢講の収入であった。図7には伊勢家(扇講を含む)・増勢講・分銅講の講田の分布を示した。増勢講は魚住町との境界をなす瀬戸川沿いに計7反7畝1歩の講田を所有した。分銅講は計2反6畝22歩の講田があり、講文書では弘化年間(1844~1848)から明治35年(1902)までは高橋家が所有したことが確認でき、以後は共有名義となる。扇講は漁家集住地区(七番地と城ノ

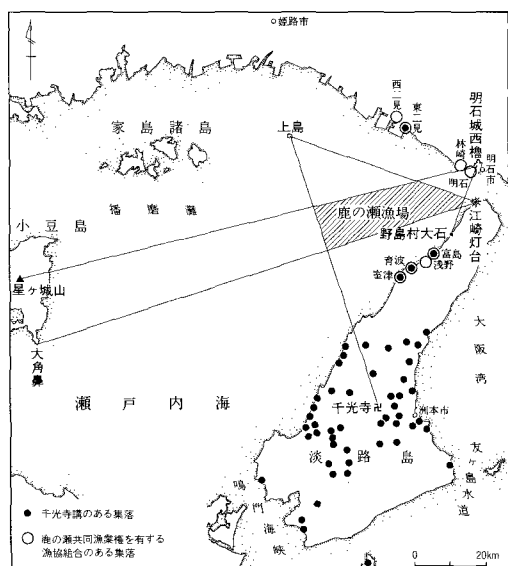


図5 鹿の瀬漁場と千光寺講の分布 (1992年)
資料) 明治36年『鹿之瀬規約書』、『播州東二見浦漁場の歴史』、及び千光寺聞き取りより作成。

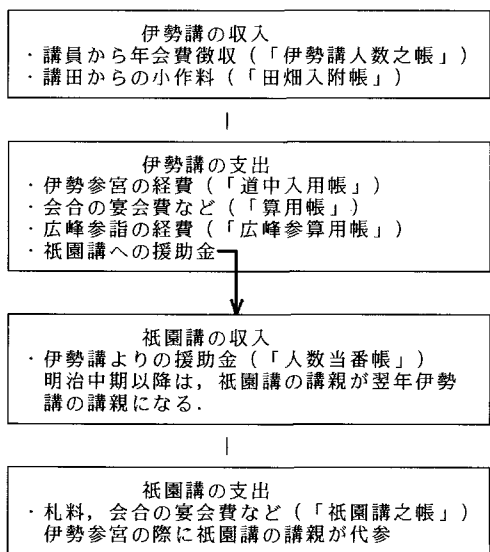


図6 明石市東二見における伊勢講と祇園講の関係
注) カッコ内は講文書名を示す。

上) に計2畝26歩の講田を所有した。このように、講ごとに講田の面積に差異があったことがわかる。講田は昭和22年(1947)10月から売却が始まり、30年代末には消滅した。講文書では伊勢家は1反5歩と3畝4歩の講田を所有したことが記されているが、後者は明治28年(1895)宅地に変更された。毎年の小作料の収入は一定ではなく、年会費と講田の小作料収入に依存した場合、定期的な伊勢参宮を行うことはできなかったと考えられる。

これに対して講の支出は、伊勢参宮経費(「道中入用帳」)のほか、お礼参りとしての広峰参詣費(「広峰参算用帳」)、年始めの会合宴会費(「算用帳」)、祇園講への援助金(「人数当番帳」)である。祇園講と伊勢講の講員名を照合していくと、ほとんど重複しない。祇園講は伊勢講からの援助金をもとに、伊勢参宮の際に講親が代参して講員配布用に札を購入し、この経費と宴会費を支出している(「祇園講之帳」)。これらの点から、祇園講は伊勢講の下部組織とみなされ、その講員の多くは伊勢講の講員に雇用された人々で

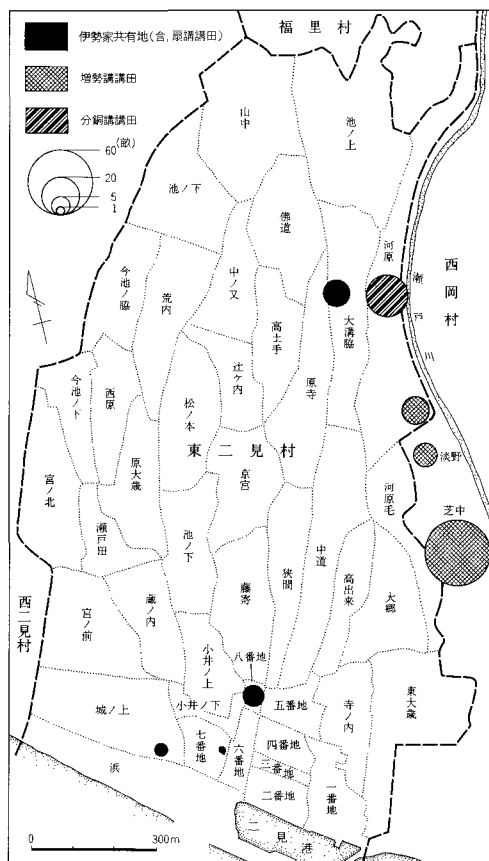


図7 明治・大正期における明石市東二見の小字と伊勢講田の分布

資料) 小字図は「播磨国加古郡東二見村地図」室田家所蔵より作成。「伊勢家共有地地租及び小作人附額記帳」明治26年、増勢講「田畑入附帳」大正15年、分銅講「地目変換地価登録届」明治42年より作成。

あったと考えられる。この伊勢講と祇園講の関係は、加古川流域の集落での聞き取りでは確認することができず、あるいは東二見固有であったかもしれない。しかし、東二見の伊勢講—祇園講関係は、集落構成員の紐帯に重要な役割を担っていたことを示唆している。

(2) 明治中期以降における伊勢講の変容 — 経済的変化との関わりで —

前述したように、年会費と講田の小作料収入に依存した場合、定期的な伊勢参宮を行うことはできなかった。講文書をもとに、表1

表1 明石市東二見における伊勢参宮年 (1793~1991年)

西暦	年 号	扇 講	源氏講	分銅講	増勢講	原の町	備 考
1793	寛政 5	○					1633より幕府領
1798	寛政10	—	○				
1804	文化 1	—	○				
1811	文化 8	—	○				
1816	文化13	○	○				1816より幕末まで、忍藩と幕府が交互に領す
1821	文政 4	○	○				
1827	文政10	○	○				
1832	天保 3	○	○	○			1830 御蔭詣り
1838	天保 9	—	—	○			
1840	天保11	○	○	—			
1845	弘化 2	○	○	○			
1853	嘉永 6	○	○	○			
1860	安政 7	○	○	○			
1865	元治 2	○	○	○			1867.8—1868.4 ええじゃないか
1872	明治 5	○	○	○			
1876	9	○	○	○			
1881	14	○	○	○			1881 人口2,310
1888	21	○	○	○			1889 二見村発足
1893	26	○	○	○		— — —	1893.5 東二見伊勢講規約改正
1894	27					○	
1898	31	○	○	—			1898 これより4年1度定期参宮
1899	32					○	
1902	35	○	○	○	○		
1903	36					○	
1906	39	○	○	○	—		
1908	41					○	
1910	43	○	○	○	—		
1912	大正 1				○		
1914	3	○	○	○	○		
1916	5					○	
1918	7	○	○	○	○		
1920	9					○	1920 人口3,085
1922	11	○	○	○	○		
1924	13					○	
1926	15	○	○	○	○		
1928	昭和 3					○	1927 二見町発足
1930	5	○	○	○	○		1929 人口3,893
1932	7					○	
1934	9	○	○	○	○		
1936	11					○	
1938	13	○	—	○	○		
1940	15					○	
1942	17	○	—	○	—		
1944	19					—	
1946	21	—	—	○	—		1947.10 伊勢講田の処分始まる
1950	25	○	—	○	○	○	
1954	29	○	—	○	○		1952.8 東西神宮社地を講の共同所有とする
1955	30					—	
1958	33	○	○	○	○		
1960	35					—	
1962	37	○	— — —	○	○		
1965	40					○	講田処分により参宮旅費は講員掛け金で賄う
1966	41	○		○	○		
1970	45	○		○	○	○	
1973	48					—	
1974	49	○		○	—		
1976	51					○	
1978	53	○		○	○		
1979	54					○	
1982	57	○		○	○	○	
1985	60					○	
1986	61	○		○	○		
1988	63					○	
1990	平成 2	○		○	○		
1991	3					○	

注) ○印は伊勢参宮を行った記録がある年次を示し、—印は参宮年と考えられるが、記録上確認できない年次である。

—印は講の解散または始まりを示す。

資料) 扇講文書は兵庫県立歴史博物館所蔵、その他は各講親が保管。

には伊勢参宮年をまとめた。これによれば、明治26年（1893）までは不定期であり、明治31年（1898）から4年に1回の定期的な参宮へと変化したことがわかる。この変化は、明治26年（1893）の講規約改正が契機となっていた（「分銅講規約」）。この規約以降、高橋家が講親を世襲した分銅講において、講親は交代制になる。八木家が講親を世襲した源氏講では、幕末から八木家と交代で寺西家が講親になり、明治35年度（1902）以降は完全に交代制となった。増本家が講親を世襲した増勢講では、本家と分家が交代で講親を勤めたが、昭和5年（1930）以降は増本家以外が講親を勤めるようになる。このように、講によって時期が異なるが、定期的な参宮への移行は講親の世襲制の廃止と不可分であった。この背景には、講収入を講田に依存し、講員ごとに年会費が不均等なそれまでの制度から、講員均一の年会費制度へと移行したことがあげられる。これは、世襲講親を頂点としたピラミッド型の講組織の崩壊を意味しており、その要因は世襲講親の経済的衰退にあっ

たと考えられる。この講親交代制への移行は、参宮装束などの華美、贅沢な宴会を戒めた規則改正に現れるように、講相互の競い合いを生みだしたのである。

しかし、このような伊勢講の隆盛は長くは続かなかった。図8は、1884～1898年の加古郡・印南郡における米と実綿の作付面積の推移を示したものである。加古郡・印南郡では米の作付面積が増加する一方で、1890年代になると実綿の作付面積が減少したことがわかる。また、この時期に魚肥の取引も減少した。肥料問屋や木綿問屋の多かった東二見は、商業構造の大きな変換に迫られる。

IIの（2）で述べたように、戦前昭和期には山陽本線土山駅南部の東二見地内に紡機製造会社、横河橋梁製作所、琴浦紡績会社が相次いで設立された。横河橋梁を除けば、いずれも外部資本によるものであり、明治中期から戦前昭和期にかけての産業構造の転換は、中心市街地における旧家の商業活動を衰退へと導いた。

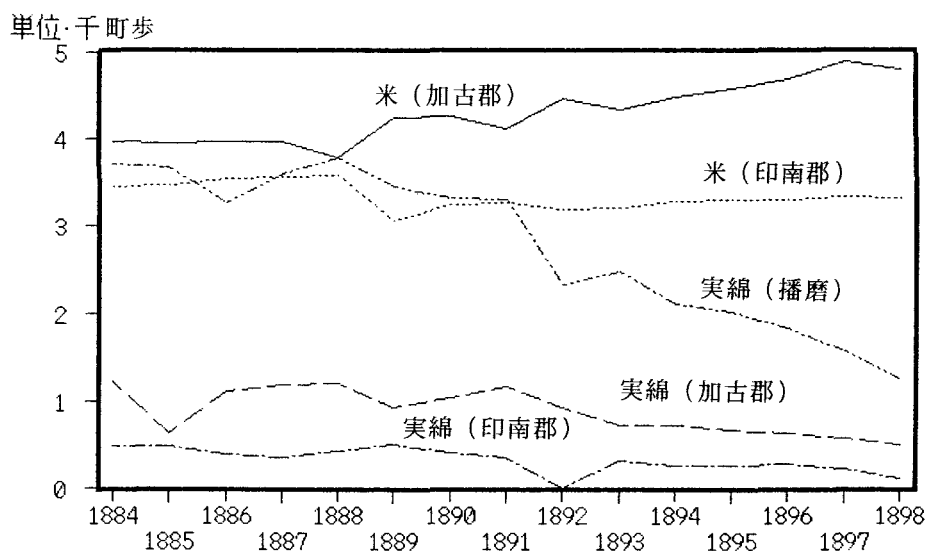


図8 加古郡・印南郡における米と実綿の作付面積の推移（1884～1898年）

資料）『兵庫県勸業年報』一橋大学経済研究所蔵より作成。

(3) 高度経済成長初期における伊勢講の変容

図9は1930年代における伊勢講7つの講員分布を示したものである。当時の講文書に記載された人名をもとに、その子孫の居住地を図示している。仲の町に山中講、東の町に増勢講、西の町に扇講の講員が多く居住したことがわかる。これらはいずれも江戸中期から世襲された講親の居住地の町内であった。もっとも扇講は漁家集団であり、元来西の町に集住していた。しかし一方では、源氏講、分銅講、紅梅講の講員居住地は分散しており、江戸中期以来の伊勢講が地縁的であったとはいえ、むしろ職縁的な集団であったと推測される。

昭和27年(1952)3月、社寺等に無償貸付されていた国有境内地の処分に関する法律によって、東の大神宮と西の大神宮は18世紀に

再編成された伊勢講の共有地となる。同年は宗教法人法により神社明細書が作成された年である。「伊勢家定記」³⁵⁾も昭和27年度以降は記載がなく、26年度をもって各伊勢講の輪番で行われた御鋤³⁶⁾当番も廃止された。これ以降、狸々講・源氏講・白梅講が次々と解散していく。存続した講も、講員数は徐々に減少したと考えられる。

図10には、昭和30年代に解散した源氏講を除き、平成4年(1992)における伊勢講6つの講員分布を示した。江戸中期以来の伊勢講では、扇講の場合、昭和9年(1934)の講員は26名であったが、徐々に減少し、平成4年(1992)には17名へと減少した。図からわかるように、その他の講はさらに大幅に講員が減少している。その一方で、明治中期に分離独立した原の町伊勢講は、町内全戸が伊勢講

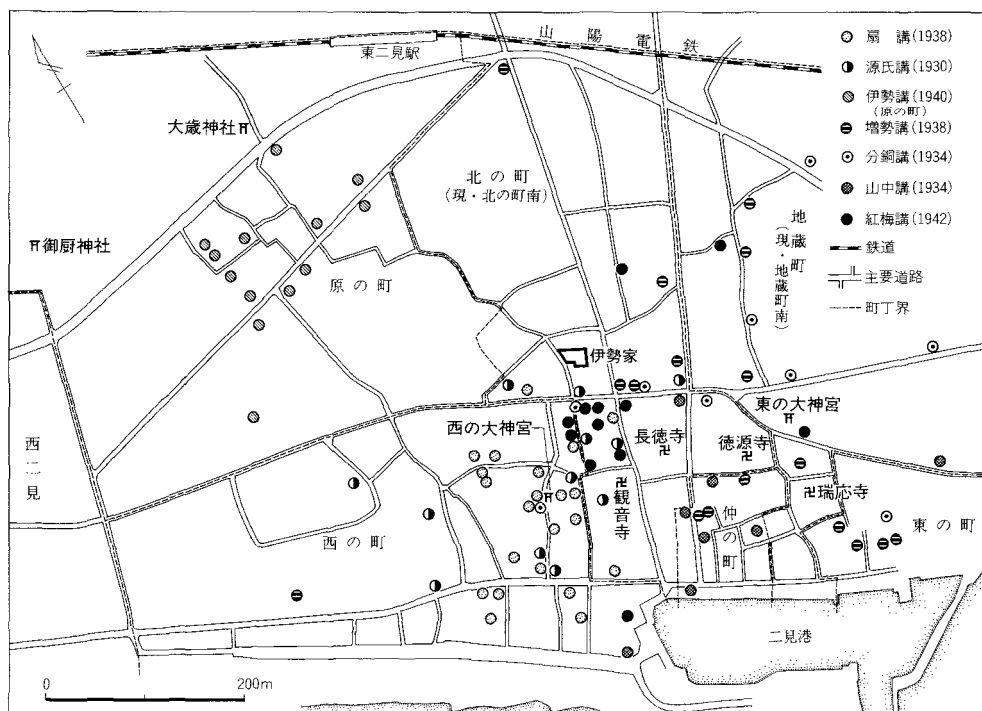


図9 明石市東二見における伊勢講の講員分布(1930年代)

資料) 扇講「萬覚帳」、源氏講「講員人名並当番帳」、原の町伊勢講「伊勢講人名帳」、増勢講「道中入用日記」、分銅講「伊勢参宮人数帳」、山中講「人名帳」、紅梅講「当番帳」より作成。

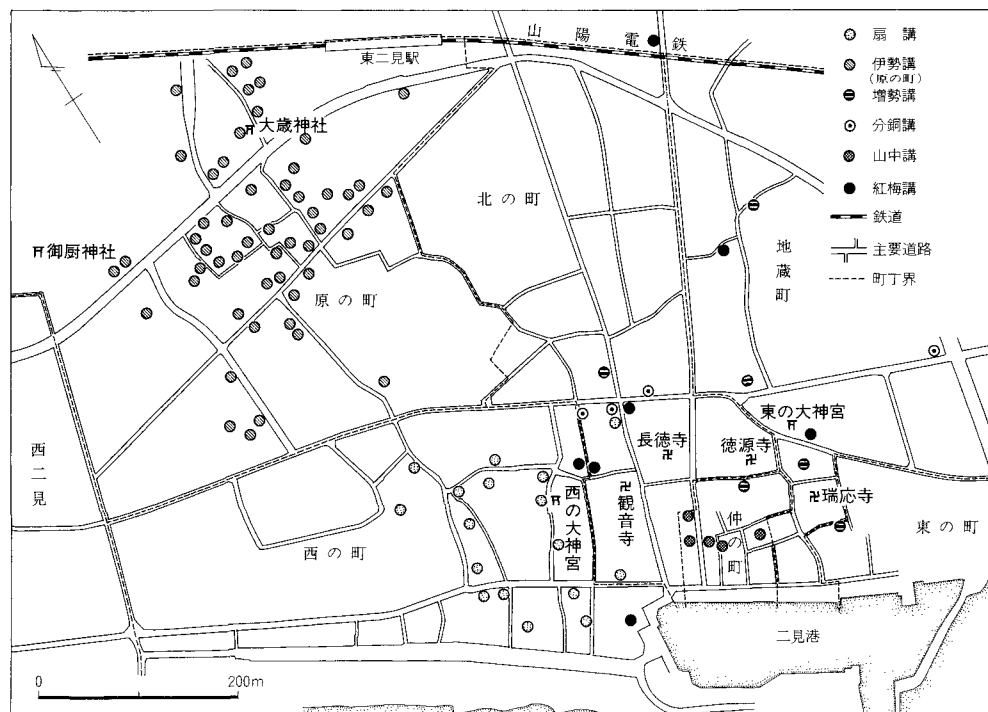


図10 明石市東二見における伊勢講の講員分布 (1992年)
(聞き取りより作成)

に加入する仕組みをとったため、13名から53名に増加している。原の町では町内会＝伊勢講であり、伊勢参宮は町内会の行楽行事となり、近年では目的地も伊勢神宮に限らなくなった。

V. おわりに

全国的にみると、伊勢講は衰退・消滅した地域が多い。しかし、近畿地方とその周辺地域には伊勢講が数多く存在し、むしろ盛んとなった地域もみられる。いずれにしても、現代の伊勢講は江戸時代のそれとは質的に変容したことが、東二見の事例から確認することができた。

江戸期における東二見の伊勢講は商家集団と漁家集団であり、職縁的な結合組織であった。これは東二見が町場であり、漁村である点に起因しており、管見では周辺村落の伊勢

講は同族的集団の例が多い。もう一つの東二見における伊勢講の特色は、伊勢参宮のみを目的とした宗教的講ではなく、下部組織に祇園講を持ち、経済的主従関係を円滑にする装置としても機能していた点である。すなわち、江戸期における東二見の伊勢講組織は、講親世襲制に基づく職縁的ピラミッド型人間関係で成り立っていた。

その変化は、明治中期と高度経済成長期に画期が求められる。明治中期になって江戸時代以来の商業構造が変化すると、東二見では講親世襲制に基づく職縁的ピラミッド型人間関係から、講親交代制による地縁的で平等な人間関係へと質的な変容がみられた。しかし、師職制度が廃止されても、依然として東二見の伊勢講は祇園講を有し、構成員に経済的諸階層を含み込みながら、構成員の親睦・融和が図られた。明治中期から大正期にかけ

て、人口増加とともに東二見では、江戸期以来の伊勢講に加入できない人々によって新たな伊勢講が組織され、伊勢講の隆盛をみた。しかし、講組織内の結合関係はやがて弱体化していく。戦時期の中断をはさみ、高度経済成長期の中で、かつて人間関係の紐帯として機能した伊勢講は、その機能を失うことによって消滅あるいは衰退した。

現在、東二見の伊勢講を聞き取りのみで判断すれば、伊勢参宮は定期的に行われ、元の町伊勢講のように、町内会行事としての伊勢参宮に留まっていると結論づけられてしまうであろう。本稿の事例からも、聞き取りに加えて、時代をさかのぼる講文書の分析が必要であることが明らかである。

以上のように、宗教文化の問題を歴史地理学で扱う場合、信仰圏内部の講組織とその地域社会における経済的・社会的変化、あるいは政治的影響との関連、ならびにこうした関連の中での講組織の変化を考察していくことがより一層必要である。それこそが、隣接分野が歴史地理学に期待するアプローチの一つではないだろうか。なお本稿では伊勢神宮の信仰圏をあえて問題とせず、また信仰圏の中に東二見を位置づけることはしなかった。その作業は現段階では性急であるからである。

(茨城大学教育学部)

〔付記〕

十数年前、田中智彦氏と東二見を歩きながらご教示をいただいたことがあった。若くして他界された畏友田中智彦氏に、この小稿を捧げます。講文書の収集にあたっては大西昌一先生、松井良祐氏、斎藤 純氏にお世話になった。講親の皆様には長期間にわたる調査にご協力をいただいた。干鰯問屋史料では古田悦造氏にご教示を受けた。記して御礼を申し上げます。なお、本研究の成果の一部はNHK歴史発見（1993年9月29日）で放映された。

〔注〕

- 1) 田中智彦の主要業績は、遺稿集『聖地を巡る人と道』、岩田書院、2004、379頁にまとめられた。また巡礼については、田中智彦「日本における諸巡礼の発達」（『聖なるものの形と場』、国際日本文化研究センター、2003）、225～243頁（『聖地を巡る人と道』終章に所収）を参照されたい。
- 2) 「講」は仏教の教典を研究する集団を呼んだ名称であり、本稿では同一信仰集団が組織した講を「宗教的講」と称することにする。
- 3) 水津一郎『社会地理学の基本問題』、大明堂、1968、248頁。
- 4) たとえば、石原 潤「ムラの中の小地域集団について」、人文地理16-2、1964、102～110頁。ただし山澄 元は、美木谷の座・講は「メンバーの地域的な限定性を有しているとはいえ、それらは決して隣保的な地域集団でもなく、まして本・分家の関係でつながる集団でもない」と述べている。山澄 元『近世村落の歴史地理』、柳原書店、1982、157頁。
- 5) 宮田 登「岩木山信仰—その信仰圏をめぐって—」（和歌森太郎編『津軽の民俗』、吉川弘文館、1970）、277～295頁。
- 6) 岩鼻通明「出羽三山信仰圏の地理学的考察」史林66-5、1983、681～726頁。岩鼻は霊山の山頂を中心とする聖域圏、山麓に展開する準聖域圏を設定し、その外側に信仰圏を位置づける。さらに信仰圏内部に三重の同心円的信仰圏を設定している。第1次信仰圏では共同体的結合の強い信仰形態、第2次信仰圏は代参講形式の信仰形態、第3次は同行仲間型の講の信仰がみられるとした。これに関しては、小田の批判と岩鼻の反論がある。小田匡保「山岳宗教研究の地理学的諸問題—岩鼻通明著『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』を評して—」、駒澤地理29、1993、135～153頁。岩鼻通明「山岳信仰研究の地理学的諸問題—小田氏の書評に答えて—」『出羽三山の文化と民俗』、岩田書院、1996、161～173頁。なお、史林論文は、岩鼻通明『出羽三山信仰の歴史地理

- 学的研究』, 名著出版, 1992, 83~138頁, 岩鼻通明『出羽三山信仰の圏構造』, 岩田書院, 2003, 67~132頁, 237~247頁に, 加除修正を加えて収録されている。
- 7) 松井圭介『日本の宗教空間』, 古今書院, 2003, 292頁。
 - 8) 金子直樹「岩木山信仰の空間構造—その信仰圏を中心に—」, 人文地理49-4, 1997, 1~20頁。
 - 9) 信仰圏の研究の中で講組織に言及した最近の論文では, 下記の研究がある。阪野祐介「新潟県・八海山を対象とした山岳信仰の展開—大崎口崇敬者の分布を中心に—」, 歴史地理学45-5, 2003, 1~18頁。野中 尚「茨城県岩間町愛宕神社の信仰圏」, 茨城地理4, 2003, 1~13頁。廣本祥己「那須岳白湯山・高湯山信仰の分布について」, 歴史地理学46-1, 2004, 15~31頁。
 - 10) 筒井 裕「山岳信仰の神社における講組織の形成—国幣中社大物忌神社を事例に—」, 歴史地理学46-1, 2004, 32~49頁。
 - 11) 船杉力修「戦国期における伊勢信仰の浸透とその背景—越後国蒲原郡出雲田荘を事例として—」, 地理学評論70-8, 1997, 491~511頁。
 - 12) 三木一彦「山間村落における信仰集団存立の地域的基盤—江戸時代の秩父郡大野村を事例として—」, 歴史地理学40-2, 1998, 2~21頁。
 - 13) 藤村健一「越前における真宗と村落社会—道場の変遷を中心に—」, 歴史地理学46-1, 2004, 1~14頁。
 - 14) 西垣晴次「近世伊勢信仰研究史の回顧と展望」(西垣晴次編『伊勢信仰Ⅱ 近世』, 雄山閣), 1984, 341頁。20年前に, 西垣は「これまでの伊勢講についての報告は, 現状あるいは明治以降のものが多く, 近世村落内部でどのような階層の人々がそこに組織され, 講と村落の関係はどのようなものであり, また講と御師との関係などについては未解明といっても過言ではない。」と述べている。
 - 15) 小野寺 淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷—関東地方からの場合—」, 人文地理学研究(筑波大学)14, 1990, 231~255頁。
 - 16) 播磨国東部では, 一つの近世村落に複数の伊勢講が存在したことは『加東郡誌』などに記載され, 山田正雄の研究などでも指摘されている。ただし, 農村部の伊勢講は同族的結合であり, 商業・漁業の町である東二見では同族的結合とはいえない。山田正雄「近世における農民の伊勢参宮について」, 史学研究80, 1961。
 - 17) 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』, 塙書房, 1982, 1158~1163頁。
 - 18) 前田正名ほか「播磨国加古郡福里村年貢資料(大西家文書)2」, 法と政治(関西学院大学)8-12, 1957, 145頁。
 - 19) 鎌倉初頭には御厨御園が激増し, 伊勢信仰が広がったとの指摘がある。前掲17) 385頁。
 - 20) 増本常守家文書による。
 - 21) 明石市企画財政部企画課「住民基本台帳」による。
 - 22) 工楽禎章家文書「工楽松右衛門略歴」。
 - 23) 明石市企画財政部企画課より聞き取り。
 - 24) 皇學館大学史料編纂所編『神宮御師資料外宮篇1』, 皇學館大学出版部, 1982, 92頁。
 - 25) 皇學館大学史料編纂所編『神宮御師資料外宮篇4』, 皇學館大学出版部, 1986, 55~56頁。
 - 26) 山中講文書「元治二年五月 定」による。
 - 27) 現在の伊勢講文書は講親の持ち回りであるが, 調査時の所蔵者は以下の通りである。伊勢家文書・扇講文書(西尾幸家)287点(兵庫県立歴史博物館寄託), 御鋏保存。山中講の帳箱には宝永2年の銘, 中屋(山中)講文書40点, 御鋏保存。源氏講文書は八木敏夫家所蔵223点。他に幟とその収納箱, 茶器などを保管。紅梅講の帳箱には天保14年の銘, 文書は戦後のもののみ。分銅講の帳箱には安政4年の銘, 分銅講文書120点, 幟, 半纏, 提灯などを保管。増勢講の帳箱には嘉永6年の銘, 祇園講の帳箱は天保11年の銘, 増勢講文書67点。狸々講文書は現存せず, 尾上品信家には安政7年銘の帳箱があり, 幟, 法被, 垂れ幕を保管。原の町

- 伊勢講は文書84点。これらのうち、伊勢家・扇講文書は大西昌一氏によって目録が作成されている。その他の講文書は筆者が仮目録を作成したが、本稿では文書表題は必要最小限の記載にとどめる。
- 28) 講には同一信仰集団による宗教的講のほか、頼母子講などの経済的講、ユイ講などの相互扶助的な講がある。これらは相互に関連性を有する場合があります。東二見の伊勢講では頼母子講を内包する。
- 29) 原の町伊勢講文書。1993年時点では明治22年(1889)以降の文書84点が残る。
- 30) 東二見では加古郡西国巡礼として臨済宗瑞応寺(23番)、長徳寺(22番)、観音寺(27番)の3か寺がある。念仏講は瑞応寺末庵、原の町薬師堂の女人講である。
- 31) 中世における広峯神社とその信仰については、『兵庫県史 第3巻』、兵庫県、1978、425～426頁参照。
- 32) 明石市林崎漁業協同組合より聞き取り。
- 33) 藤井徳太郎編『鹿の瀬漁場の変遷史』、明石市林崎「鹿の瀬会」、1954。黒田義隆・大西昌一編著『播州東二見浦漁業の歴史』、東二見漁協、1978、207頁。
- 34) 小野寺 淳「東播磨における近世の伊勢参宮一明石市東二見を事例に一」、交通史研究35、1995、84～95頁。
- 35) 「伊勢家定記」は兵庫県立歴史博物館寄託の扇講文書と坂口八郎家に所蔵されている。
- 36) 50cm程の桑の木を鋏型に細工したもの。田植えの際に御鋏を持って廻り、五穀豊穡を祈る。

Changes in Religious Organizations for Pilgrimage to Ise Shrine: A Case in Higashi-futami, Akashi City

ONODERA Atsushi (Ibaraki University)

The purpose of this study is to make clear how religious groups for pilgrimage to Ise Shrine were organized and how they were changed with the condition of the local economy since the end of the 18th century. Higashi-futami in Akashi City, Hyogo prefecture is chosen as the area for this case study. It faces the Seto Inland Sea, and has been inhabited by fishermen, merchants and peasants.

There once existed ten religious groups for pilgrimage to Ise Shrine in Higashi-futami. Their changes took place twice, that is, in the mid-Meiji period and at the end of the high economic growth period after the Second World War. In the mid-Meiji period when the economic structure changed due to the decline of cotton cultivation in the northwesterly neighboring Kako and Innami Counties, cotton traders in Higashi-futami who lost a leading role in the local economy gave up their position of the head of some religious groups to other members. The head came to be determined by shift system among the group members instead of hereditary system of the specific family. The other change in religious groups came up at the end of the high economic growth period, when the number of the members decreased and most groups sank into decay.

Key words: religious group for pilgrimage to Ise Shrine, religious group, pilgrimage to Ise Shrine, Higashi-futami in Akashi City

小野寺報告コメント

島 津 俊 之

小野寺 淳氏の報告「伊勢参宮における講組織の変容—明石市東二見を事例に一」は、同氏の前稿（「東播磨における近世の伊勢参宮—明石市東二見を事例に一」、交通史研究 35, 1995）の続編ともいえる内容であった。前稿において小野寺氏は、寛政年間（1789-1801）より現在まで延々と書き継がれている伊勢講文書を主な史料として、東二見村（現在の明石市二見町東二見）における近世の伊勢参宮について考察された。そこでは、近世の東二見村には伊勢講が10集団存在しており、東の講と西の講に5つずつ分かれる双分制のごとき状況を呈していたこと、伊勢家と呼ばれる2名の代表者が講の行事を取りしきっていたことが明らかにされた。また、畿内やその周辺地域では講員全てが同時に参宮する「総参り」が主であったとする通説に対して、東二見村では講員の参加率は4～7割に過ぎず、むしろ非講員や未婚女性が同行する風習がみられたことが明らかにされた。さらに、伊勢参宮の頻度は近世においては不定期であり、参宮以外の物見遊山的な要素は乏しいことなどが論じられた。

これをうけて、今回の小野寺氏の報告は明治期以降の講組織の変容について論じるものであった。具体的には、寛政5（1793）年から平成2（1990）年までの200年以上に及ぶ伊勢講の参宮データや、現在の講組織の詳細な聞き取り調査結果、さらには1930年代および1992年の時点での講員分布図などを呈示しつつ、明治中期における綿作の衰退が商家を中心とする講集団の衰退につながったこと、さらには、高度経済成長末期における海苔養殖の定着が網元を中心とする漁家の講集団の衰

退につながったことなどが論じられた。

小野寺氏の報告は、広範な史料所在調査と現地での綿密な聞き取り調査、そして統計資料的確な裏付けに支えられた、きわめて有意義な内容を含むものであった。とくに、200年以上に及ぶ伊勢講の参宮データの呈示と分析はまことに壮観であり、通常の日本史研究の時代区分でいえば、近世史・近代史・現代史の3分野を縦断する内容を含んでいる。こうした通時代的な視点は、時代を超えて変わらぬものを追い求めてきた日本民俗学や、日本史的な時代区分にあまりこだわらない歴史社会学などに特有のものといえるが、他方では、「景観変遷史」という視点を有する歴史地理学に伝統的に分かち持たれてきたものでもある。これらはいずれも、時間の幅を限定した精緻な史料分析を得意とする日本史研究からみれば大胆すぎる内容を含むものかもしれないが、通時代的な視点を欠いた歴史研究は一面的なものにならざるをえないことも確かである。

こうした点を踏まえて、ここでは次の三点についてコメントさせていただきたい。

一点目は、明治中期の人口増加に伴って分離独立した「原の町伊勢講」が、現時点で町内会全戸が講に加入するという、ある意味で「総参り」的な形態をとっているという点に関してである。この事実自体、きわめて興味深いものといえるが、講という伝統的行事の衰退が取りざたされる現代において、なぜこの講のみがこうした全戸加入の制度を維持しているのであろうか。また、そうした制度に反対などは出ていないのであろうか。これが一点目の疑問である。

二点目は、小野寺氏の前稿でも言及されていた、講集団の双分制に関してである。現在でも東二見の講組織は、「東の大神宮」と「西の大神宮」をそれぞれ祀る東西の双分的集団に分けられていることが報告された。当日呈示された1930年代の講員分布図をみると、確かに東の大神宮を祀る講集団のメンバーは集落の東側に分布する傾向があり、西の大神宮を祀るメンバーは西側に分布する傾向がみられるが、東西二つの集団は空間的に完全に住み分けているわけではなく、相互に入り混じりがみられる。これら東西の講集団は、近世期には空間的にも完全に東西に住み分けていたのであろうか。それとも、東西への双分は地理的な区分というより、むしろ近世期からすでに観念的あるいは表象的な区分として存在したのであろうか。これが二点目の疑問である。

三点目は、近代以降の伊勢講の衰退の要因分析に関してである。上述のように小野寺氏は、その要因を、講集団の有力メンバーである商家や漁家を支えてきた産業の衰退に求められた。これはすなわち、講という社会的・文化的事象の衰退要因を経済的事象に求めるということであり、基本的に間違った分析ではないと思われる。しかし、専門外の筆者の誤解かもしれないが、通説では伊勢参宮は宗教的行為というだけでなく、レクリエーション（レジャー）の一形態でもあるというふうに理解されてきたと思われる。そうだとすれば、伊勢講の衰退要因の一つとして、近代以降の余暇行動の多様化といった社会的・文化的要因も考慮されるべきではあるまいか。これが三点目の疑問である。もっとも小野寺氏の前稿では、近世東二見の伊勢参宮に物見遊山の要素が乏しいことが指摘されており、今回の報告での経済的要因の強調は、その流れからすれば当然のことかもしれない。筆者のつまらない疑問などは、通説に果敢にチャレンジされる小野寺氏にとっては、とっくの昔

に織り込みずみといったところであらうか。

それはさておき、東二見という場所と伊勢信仰との関わりは興味深く、今後も解明されるべき多くの問題を含んでいると思われる。東二見村は、隣接する西二見村とともに御厨神社を氏神としてきたが、この「御厨」という神社名は東西両二見がかつては伊勢神宮領であった可能性を示すものである。これはシンポジウム後の雑談のなかで、小野寺氏が筆者に語られたことでもある。そういえば「二見」という地名自体、伊勢の有名な二見浦にちなんだものかもしれない。伊勢講の研究フィールドとして、小野寺氏は恰好の場所をみつけられたということであらう。今後の研究のさらなる進展を大いに期待したい。

さて、今回のシンポジウムのコメンテーターを依頼されたのは、一昨年（2003年）の人文地理学会大会（於 関西大学）の折であった。筆者は村落研究から遠ざかって久しいので、よりふさわしいと思われる方の具体名まで挙げて辞退したが、結局はオーガナイザーの小田匡保氏の説得に根負けして引き受けさせていただくことになった。しかし、当該分野の研究の最新状況に通じていないこともあり、あまり有益なコメントができなかったことをお許し願いたい。なお、小野寺氏の報告の本筋には全く関係ないことであるが、東二見村の土地利用復原図の史料として挙げられていた明治14年の「播磨国加古郡東二見村地図」とは、おそらく当時全国的に進行中であった内務省地理局の地籍編製事業に基づく地籍図であらう。ちなみに筆者の手許には、兵庫県宍粟郡波賀町有賀自治会が保管する「播磨国宍粟郡有賀村地図」のコピーがあり、それには「右有賀村地図書面之通相違無御座候也 播磨国宍粟郡有賀村地籍下調人 明治十四年」（傍点筆者）の文言がみられることを付記しておきたい。

（和歌山大学教育学部）

小野寺報告についての座長所見

三 木 一 彦

小野寺氏の報告は、兵庫県明石市東二見における伊勢講の変容を、詳細な現地調査および史料調査に基づいて考察したものであった。18世紀末から現代までと、対象となる年代が長期にわたっており、通時的な分析を一つの武器とする歴史地理学の特性が活かされた研究であった。また、講組織の変容と地域経済の変化とを結びつけて検討したことや、伊勢講以外の講にも目を向けたことは、地域における信仰をみる上できわめて有効な視点であると考えられ、そうした点からも非常に興味深い報告であった。

報告によれば、対象地における伊勢講の変容は、明治中期と高度経済成長期末に起こっており、それぞれの時期における経済構造の変化と関連して、講組織の衰退がみられた。たしかに、かつて東二见到10以上あった伊勢講はほぼ半減しており、その一因を地域の経済的な変化に求めることは適切な指摘であろう。

ただし、そのような変化にもかかわらず、存続している講や、講員が増えてきている講すらあることも事実である。また、大量の伊勢講文書が今日に残されていることにも、何らかの意味があるのではないかと考えられる。報告の中では、伊勢講が広峰講や祇園講といった他の講と関係していることにふれられていたが、そうした関係も含め地域社会における伊勢講の意味が多義的で、狭義の「伊勢信仰」という言葉ではくれない多様な役割をもっていた（あるいは、今ももっている）ことが予想される。そして、その役割もまた、決して不変のものではないのであろう。質疑応答時に提起されていたように、東

二見の諸宗教施設と伊勢講との関わりや、講の加入・脱退の理由やその手続を分析することで、東二見における伊勢講の役割をより鮮明にすることができるものと考えられる。その際、配布資料に示されていたような講規約を時系列で並べて比較検討していくことは、有力な指標となり得よう。

当日の会場で提起されたもう一つの問題として、娯楽の多様化といった社会・文化的な側面をどのように地域における講の変化と関わらせてとらえるか、という点がある。これは、講の変化の原因を内部的なものと外部的なものに区別する必要がある、とした鈴木氏による総合コメント中の見解とも重なる部分である。この問題の解明は容易ではないが、講以外のさまざまな生活組織や、地域をめぐる社会的状況など、さらに多様な事象を絡めつつ考察を重ねることが重要であるとみられる。

今後、宗教地理学研究を深化させていく方向性の一つとして、聖地や門前町・巡礼路といった宗教的側面が明らかに目につく場所にとどまらず、一般的な町や村における信仰のあり方を抽出していく作業が必要である、と座長は考えている。この小野寺氏の報告に即していえば、地域生活の中での伊勢講のあり方を丹念に検討することで、伊勢信仰の性格そのもの（例えば、流通と結びついていたのではないかと、という指摘が会場から出されていた）を改めてとらえ直す道が開けてこよう。その道は、大上段に構えるのではなく、この報告のような地域調査を蓄積していくことで徐々に見通せるようになってくるものと思われる。（文教大学教育学部）